

ヒブ（Hib）ワクチン接種についての説明書

【接種対象者】

生後2～60か月に至るまで（5歳の誕生日の前日まで） ※接種時点で大阪市民であること

【接種方法】

| 接種開始時期 | 回数 | 接種間隔 |
|---------------------------|----|--|
| 生後2～7か月に至るまで ※標準的な接種年齢 | 4回 | 初回接種：27日（医師が必要と認める時は20日）以上（標準的には56日まで）の間隔をあけて3回 追加接種：初回接種終了後7か月以上（標準的には13か月まで）の間隔をあけて1回 ※初回2回目及び3回目の接種は、生後12か月に至るまでに行い、それを越えた場合は行わない。この場合、追加接種は可能であるが、初回接種終了後、27日（医師が必要と認めるときは20日）以上の間隔をあけて1回行う。 |
| 生後7～12か月に至るまで | 3回 | 初回接種：27日（医師が必要と認める時は20日）以上（標準的には56日まで）の間隔をあけて2回 追加接種：初回接種終了後7か月以上（標準的には13か月まで）の間隔をあけて1回 ※初回2回目の接種は、生後12か月に至るまでに行い、それを越えた場合は行わない。この場合、追加接種は可能であるが、初回接種終了後、27日（医師が必要と認めるときは20日）以上の間隔をあけて1回行う。 |
| 生後12～60か月に至るまで | 1回 | |

1 ヒブ（インフルエンザ菌 b 型）と細菌性髄膜炎について

体の中で最も大切な部分ともいえる脳や脊髄を包んでいる膜を髄膜といい、この髄膜に細菌やウイルスが感染して炎症が起こる病気が髄膜炎です。

乳幼児の細菌性髄膜炎を起こす細菌はいくつかありますが、原因の半分以上を占めているのが「インフルエンザ菌 b 型」という細菌で、略して「Hib（ヒブ）」と呼ばれています。ヒブは冬に流行するインフルエンザ（流行性感冒）の原因である「インフルエンザウイルス」とは全くの別ものです。また、他の多くの細菌やウイルスとは異なり、ヒブは乳幼児に感染しても抗体（免疫）ができず、繰り返し感染することがあります。乳幼児の細菌性髄膜炎の初期症状は、発熱や嘔吐、不機嫌、けいれんなどで、風邪などの他の病気の症状と似ているため、早期に診断することはとても難しい病気です。

ヒブによる細菌性髄膜炎（ヒブ髄膜炎）は、5歳未満の乳幼児がかかりやすく、特に生後3か月から2歳になるまではかかりやすいので注意が必要です。日本の年間患者数は少なくとも600人と報告されており、5歳になるまでに2,000人に1人の乳幼児がヒブ髄膜炎にかかっていることとなります。ヒブ髄膜炎にかかると1か月程度の入院と抗生物質による治療が必要となりますが、治療を受けても約5%（年間約30人）の乳幼児が死亡し、約25%（年間約150人）に発育障がいや聴力障がい、てんかんなどの後遺症が残ります。さらに最近では抗生物質の効かない菌（耐性菌）も増えてきており、治療が困難になってきています。その他にもヒブは、肺炎、喉頭蓋炎、敗血症などの重篤な全身感染症を引き起こします。

2 ヒブワクチンについて

ヒブワクチンは、インフルエンザ菌 b 型から精製したきょう膜多糖体とトキソイドを結合した不活化ワクチンです。このワクチンの接種によって、ヒブ感染症に対する高い予防効果が認められています。

ワクチン製造の初期段階に、ウシの成分（フランス産ウシの肝臓および肺由来成分、ヨーロッパ産ウシの乳由来成分、米国产ウシの血液、心臓および骨格筋由来成分、ブラジル産ウシの心臓由来成分）が使用されていますが、その後の精製工程を経て、製品化されています。また、このワクチンはすでに世界100か国以上で使用されており、発売開始からの14年間に約1億5千万回接種されていますが、このワクチンの接種が原因でTSE（伝達性海綿状脳症）にかかったという報告は1例もありません。したがって、理論上のリスクは否定できないものの、このワクチンを接種された人がTSEにかかる危険性はほとんどないもの

と考えられます。

3 ヒブワクチン接種の副反応

ヒブワクチン接種後に、他のワクチン接種でもみられるのと同様の副反応がみられますが、通常は一時的なものなので数日で消失します。最も多くみられるのは接種部位の発赤（赤み）や腫脹（はれ）です。また発熱が接種された人の数%に起こります。

重い副反応として、非常にまれですが、海外で次のような副反応が報告されています。

- (1) ショック・アナフィラキシー様症状（じんましん・呼吸困難など）
- (2) けいれん（熱性けいれん含む）
- (3) 血小板減少性紫斑病

4 予防接種をうける前に

(1) 一般的注意

気にかかることやわからないことがあれば、予防接種をうける前に担当の医師に質問しましょう。予診票は接種をする医師にとって、予防接種の可否を決める大切な情報です。保護者が責任をもって記入し、正しい情報を接種医に伝えてください。

(2) 予防接種を受けることができない方

- ① 明らかに発熱している方（通常は37.5℃を超える場合）
- ② 重い急性疾患にかかっている方
- ③ このワクチンの成分または破傷風トキソイドによってアナフィラキシー（通常接種後30分以内に出現する呼吸困難や全身性のじんましんなどを伴う重いアレルギー反応のこと）をおこしたことがある方
- ④ その他、かかりつけの医師に予防接種を受けないほうがよいといわれた方

(3) 予防接種を受けるに際し、医師とよく相談しなければならない方

- ① 心臓血管系疾患、腎臓疾患、肝臓疾患、血液疾患、発育障害などの基礎疾患のある方
- ② 過去に予防接種で接種後2日以内に発熱、全身性発しんなどのアレルギーを疑う症状のみられた方
- ③ 過去にけいれん（ひきつけ）をおこしたことがある方
- ④ 過去に免疫状態の異常を指摘されたことのある方もしくは近親者に先天性免疫不全症の者がいる方
- ⑤ このワクチンの成分または破傷風トキソイドに対してアレルギーをおこすおそれのある方

(4) 接種を受けた後の注意事項

- ① 接種を受けた後に、急な副反応が起こることがありますので接種後30分間はその場で様子を見るようにし、30分たってから医療機関を出るようにしましょう。
- ② 接種後に高熱やけいれんなどの異常が出現した場合は、速やかに医師の診察を受けてください。
- ③ 接種後1週間は体調に注意しましょう。また、接種後、腫れが目立つときや機嫌が悪くなったときなどは医師にご相談ください。
- ④ このワクチンの接種後、違う種類のワクチンを接種する場合には、6日間以上の間隔をあける必要があります。ただし、同時接種を希望する場合は、医師にご相談ください。
- ⑤ 接種部位は清潔に保ちましょう。入浴は問題ありませんが、接種部位をこすることはやめましょう。
- ⑥ 接種当日は激しい運動はさけてください。その他はいつも通りの生活で結構です。

5 副反応が起こった場合

予防接種後、まれに副反応が起こることがあります。予防接種と同時に、ほかの病気がたまたま重なって現れることもあります。予防接種を受けた後、接種した部位が痛みや熱をもってひどく腫れたり、体調変化が現れた場合は、速やかに接種した医師（医療機関）の診断を受け、保健福祉センターに連絡してください。

大阪市保健所・各区保健福祉センター